

「キリストはおのれを低くして」

イザヤ書
ピリピ人への手紙

第45章22～25節
第2章1節～11節

説教 岡村 恒牧師

〈主イエス・キリストはおのれを低くし、むなしくして従順であられた。神はこのキリストを高く引き上げられた。〉ピリピ人への手紙第2章の《キリスト讃歌》は高らかに宣言します。この初代教会と同じ信仰を、私たちは世界中のキリスト者と共に、礼拝のたびに『使徒信条』の中で告白しています。(〈我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。〉以下)

御言葉は、主イエスに結びつけられて生きるキリスト者に、キリストと同じ思いを抱いて歩むようにと勧めます。キリストが「おのれを低くして」(8節)下さったように、あなたがたも「へりくだった心をもって」(3節)歩んだら良いと言うのです。この《キリスト讃歌》には、〈キリストの謙卑(けんび)と高挙(こうきょ)〉が歌われています。神のひとり子、神と等しいお方が、地上に下って人間と同じ僕のかたちをとり、十字架の死を引き受け、死んで陰府にまで下ってくださった。このお方を神は、陰府から引き上げ、天にまで、すべてのものの上にまで引き上げて下さった。この出来事が、私たちすべての者の救いのためになされた事だ、と歌うのです。

様々な迫害と困難の中で、信仰を抱いて生きるキリスト者に対して、パウロは力強く、愛情を込めて語りかけます。一人一人の信仰者の顔を思い浮かべながら、「キリストによる勧め、愛の励まし、御霊の交わり、熱愛とあわれみとが」(1節)が、もう既に与えられているので、「同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって」(2節)、パウロの喜びを満たして欲しい、と語りかけます。キリストを信じて歩む道へと私たちを招きます。

主イエスは「天地の造られる前から」父なる神と共におられ、創造に関わられたお方です。(エペソ人への手紙 1章4節、ヨハネによる福音書 1章1節～3節)しかしこのお方がやがて、私たちの救いのために、ご自身を小さく低くして、〈処女(おとめ)マリヤより生まれ〉て下さいました。地上に下り、私たちと同じ姿になって地上の旅を歩み、私たちの痛みと悲しみを全て知り尽くして下さいました。私たちの弱さを思いやるために、「罪を犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われ」たのです。(ヘブル人への手紙 4章15節)

主イエスは、神と等しいお方です。しかし、全てを捨てて、私たちと同じ無力な赤ちゃんとして生まれ、一番低い所から歩み始められました。またその最後は、最もむごたらしい十字架での死でした。キリストは、死に至るまで神のご計画に従順であられました。死の前夜、ゲッセマネの園で、「みこころのままに」(マタイによる福音書 26章39節、他)と祈られました。そして十字架の上で、私たちの為に執り成し、私たちに代わって絶望の叫びを上げて死んで下さいました。神に裁かれる必要など一切無いお方が、私たちの身代わりとなって、最後まで身を低くして、命を注ぎ出して下さいました。

聖餐礼典の中で、「主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである」(コリント人への第一の手紙 11章26節)という御言葉を読み上げます。主の食卓は、「主の死を告げ知らせる」食卓です。この私のために、神のひとり子が低く下り、十字架の死に至るまで下って下さり、ご自身の命までも与え尽くして下さいました。このことによって、私の罪が赦され、永遠の命が与えられたのです。神はこのお方を死から引き上げ、ご自身の御元にまで高く上げて下さいました。私たちは主の食卓を囲むたびに、主の死を告げ知らせます。このお方が死から引き上げられた日曜日ごとに集まって、主の死と復活とによって成し遂げられた救いのみ業を確認し、主を讃美して歩むのです。私たちの救い主、主イエス・キリストは、今、生きておられ、再臨の日の準備をしておられます。その日、私たちは神の元で食卓を囲みます。しかし今、この場所で食卓を囲みながら、神の約束が確実であることを共に確認して歩んでいるのです。

元々神のみ心ところにおられたお方が、他の誰にも味わうことができない暗闇と絶望を、この私のために、あなたのために、味わい尽くして下さいました。「それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった」(9節)のです。ただ主イエスの御名だけが、私たちを生かし、私たちを神のみ元にまで高く引き上げて下さいます。やがて終わりの日、「イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が、『イエス・キリストは主である』と告白して、栄光を父なる神に帰する」ことになる(10節、11節)のです。

(記 岡村 恒)